

私の原点、但馬の昆虫

足立 義弘

1979年のフィールドノートの最初のページのメモが、「4月28日、木下氏の車に乗せてもらい、金屋へ9:00ごろ到着。天候は曇りで寒く、とてもチョウなど出る状態ではなかった…」という書き出しで始まっている。同じ年の5月10日も「9:00金屋着、金山峠への登山口へ向かう途中でウスバシロチョウを多数目撃…」と記している。

まだ車を持っていなかったころ、京都発の夜行に乗って、明け方に最寄りの駅に着き、駅で夜が明けるまで休む。そしてバスで、時には木下さんなどの車にお世話になって目的地へ向かう。夜はテントで自炊し、ヌエの鳴き声に脅えながら寝た。移動はとにかく歩いた。荷物が重たくて採集どころではないこともしばしばあった。こんなやり方で但馬のフィールドへ出かけていた。

ノートを見ていると、いろいろ思い出す。神鍋でのウスバシロチョウのマーキング調査、扇ノ山でのヒメオオクワガタの発見、ピドニアの調査など。また行く先々の宿泊地（山小屋、民宿、地元の会員のお宅）では夜みんなが集まり、夜のふけるのも忘れて虫の話をした。この時期の写真を見ると、みんなうら若き美青年であったことに驚く。私にとってこの時期、但馬のフィールドへ出かけるのは生活の一部となっていた。

そして、私は写真も撮り続けてきた。最初は採集ついでの記録写真のつもりでいたのが、今では自然や虫の生態写真が主で、採集や調査は二の次になっている。



扇ノ山小ヅッコ小屋前で(1983年9月)。

左より、山本一幸氏・島田真輔氏・谷角素彦氏・筆者

会誌IRATSUMEの号を追って私の原稿を見ていると、原稿の対象となる虫に合わせて撮っていることがわかる。まずはチョウとトンボ。そして、カミキリ、クワガタ、雑昆虫と変化し、さらに環境や植物と何でも撮っている。もちろん、会員のみなさんの生態写真もだ。

チョウではスジボソヤマキ、アサギマダラ、カシワ林のキマダラルリツバメ、甲虫ではヒメオオクワガタやコルリクワガタなどのクワガタムシ、ルリボシカミキリを始めとするカミキリの仲間、ウンコ虫、スジグロベニボタル、ハンミョウなど、思い出深い場面がフィルムに残っている。

キマダラルリツバメを撮ったときは、5年間も村岡町耀山へ通った。1981年7月9日、この年京都から通うこと3週目にしてやっと納得できる写真が撮れた。

ルリボシカミキリを撮ったときは偶然だった。小ヅッコ小屋のブナの朽木に数頭の個体がたむろし、1頭のメスに2頭のオスが交尾を挑もうとしていたところを撮った。ルリボシカミキリを同時に複数見たのは、この時だけだ。

コルリクワガタは1985年5月3日、小ヅッコで初めて見つけた。ブナの新芽をスリーピングしてネットに入れたものだった。次の日には、周りの木々の新芽に多く飛来しており、感動とともにシャッターを切ったのを覚えている。

ゴホンダイコクコガネは出石の桐野で撮った。新鮮な鹿の糞にツノコガネやマグソコガネの仲間が次から次に飛来するのを夢中で撮った。

このようにして但馬の虫を撮り続け、但馬を代表する昆虫を主に、数々の迷場面をフィルムに納めた。自分で撮った写真は、撮った時の状況を覚えている。フィルムを見ていると、その時の感動と興奮が蘇るのだ。写真には臨場感もある。

私にとってこれまで、フィールドとは但馬のことであったし、写真のほとんどが但馬の虫や自然であった。とにかく但馬の自然のなかに身を置くこと自体がなによりも楽しかった時代である。

最近はずだんだん動き難くなってきた。時間的にである。但馬へ出かける回数もだんだん減ってきた。いろんな理由をつくり、目的を決め、計画的にやろうとするのだが、思うようにいかないのだ。自由になる時間の絶対量が確実に減っている。社会的には最も忙しい年代にさしかかる時期である。このことは私一人だけの問題ではないはずだ。これから但馬や自然とどう付き合っていくか、ちょっとした問題なのである。

もう一つの問題は、何を撮るかということだ。生態写

真というのはなかなか難しい。ただ虫を撮ればいいのではない、ということが解ってきた。最近よくいわれる、自然環境や人の生活も含めた自然の多様性の問題だ。虫を撮るとき、この多様性を感じることができる写真を撮っていかねばならないと思っている。以前から感じていたことだが、このことを最も強く感じたのは、『私たちの川—竹野川の自然とくらし—』の出版に係わったときだ。自然環境や風景、さらに人の生活まで、なんでも撮ることだと思いはじめた。ただし懐と相談のうえでだが。

実は最近、普通種を対象に“身近な自然にいる虫”を撮っている。きっかけは子どもが通っている保育園の関係者などから、子どもたちが持ち込む虫についていろいろな質問を受けたり、相談されたりしたことだった。但馬のフィールドではほとんど対象にしてこなかった虫たちだ。

名前が判らないといって持ち込まれるチョウやガの幼虫、庭木や花など園芸植物につく虫など、これまで気にもしなかった虫たちが写真の対象となる。イラガのなかまには何種類もあり、繭の形や作る場所も違う。カマキリも種類ごとに卵囊の形が違い、成虫との組み合わせがおもしろい。知っているつもりが知らなかったり、意外な習性に気がついたり、案外新鮮な発見や驚きがある。

これらの虫を対象にすることで、時間が限られていても、短時間で撮影でき、日常の生活のなかでも継続できる。そしてなによりも、時間をかけて遠方へ出かけなくても、虫と自然に関わりを持ち続けられる。保育園や学校の行事、家族連れのお出かけや、子どもたちとの散歩の合間、時には仕事の出先で、撮っている。写真のテーマとしても幅広くておもしろい。今の私の条件に合わせて虫と付き合おうということだ。もちろん、時間のゆるすかぎり但馬へも行く。私にとって20年間通い続けた但馬は、基本であり原点だからだ。

しばらくはこんなやりかたで、但馬との付き合いが続きそうだ。

但馬むしの会が結成されて20年たった。最後に、容姿は変わっても、但馬の虫と自然に対する思いを変わずに持ち続けている会員のみなさんに、敬意を表しておきたい。

ムカシトンボに魅せられて

山崎 喜彦

(1) ムカシトンボとの出会い

私にとってムカシトンボとの出会いは、1982年の上田尚志氏との出会いにより始まる。故郷但馬に帰ってきた私は、最初蝶を中心に昆虫全般の採集を始めようとしていた。そんなある日、「和田山町糸井溪谷にはムカシトンボという珍しいトンボが生息している」と豊岡高校の先輩である上田氏より教えていただいた。それまで私はトンボには全く興味がなく、標本箱には1個体のトンボ標本もなかった。1982年の春に糸井溪谷でデビッドサナエを採集し、上田氏に「これがムカシトンボですか」と聞きに行ったほどであった。

(2) ムカシトンボに魅せられて

ムカシトンボは、トンボ類の中でも特徴のある古い形態や生態を持つため、「生きた化石」と呼ばれている。また、日本の重要な昆虫類の1種にも指定され、環境保全状態の良い森林の指標生物としても注目されている。かつては但馬でもその生息が確認された場所は少なく、大変珍しいトンボとされていた。

私がムカシトンボと関わりをもった最初の発見は、産卵痕であった。もちろん、その植物がオタカラコウという名前であることは知らなかったし、トンボが植物に産卵することさえ不思議に思えた。知らないことを知りたくなるというのは、誰しも同じであろう。私のムカシトンボへの興味・関心は次第に高まっていった。

私のムカシトンボ調査は、1983年から本格的になった。糸井溪谷を中心に、まずは成虫の行動観察と産卵調査を行った。特に力を入れたのが、オタカラコウの分布状況と産卵場所との関係であった。溪流を歩きながらオタカラコウを見つけては、葉柄を1本1本確認し、産卵しているかどうかを調べるのである。産卵痕の発見の喜びは大きかったが、産卵痕数を数える度に足はしびれ、辛抱のいる調査であった。糸井溪谷ではオタカラコウ以外にワサビ・ウバミソウ・ウバユリ・フキへの産卵も確認された。しかも、ムカシトンボは上流域から下流域に行くにつれ、対象となる植物の生育状態に合わせて、産卵植物を変えているのには驚いた。

その後は、ムカシトンボにとりつかれたように成虫・幼虫・産卵について無我夢中で調査・観察に明け暮れた。1年間に100日以上、糸井溪谷に出向いた年もあった。